雜事記　八上

章

漫録

第一

内閣文庫
和書類
三四五四三號
三九冊
三六函
一一架

内閣文庫
和書類
三四五四三號
三九冊
二一三函
四架

内閣文庫		
番號	和	34543
冊數	39	(8)
函號	213	32

国立公文書館 National Archives of Japan

寛政六寅年八月十六夜良夜乃題を
下し賜り各吟

八月十六夜　四折詠草

松平越中守
定信

詩歌

四の海波をさまる世成池水乃家中に清き月乃光りのくもらぬを
も清き乃道もつゆもかけす明らかに千代に逢ふ今宵月乃秋

金城夜色倚崔嵬三五登臨百尺臺萬里祥風四
王坐一天明月宿　優盃雝聲豈獨晴
光賞詠思非綠搖　落催竊善千秋雲

霽淨桂輪長與德輝開

右中秋兼　朝命作

源乗完　松平和泉守

詩哥再拜稽首

月清き秋乃最中能歌にあらそふらん末も久方の空

碧空雲霽九門前　宇宙風清三五天

月出海濤光若濕　人唫山閣事堪傳

文尊舊曲周家俗　詩搆新詞漢代篇

閑興未央催曉色　民竈早巳起炊煙

右良夜作　應教

八月十五夜　三折詠草

氏教　戸田采女正

曇りなき御代能かゝみと秋毎にみらく今宵の月能さやけき

てらせ給ふ其名も四方に歌みつる今宵を秋乃中空能月

懷紙端作

秋日詠殿中同詠十五夜月應教和歌

義隆　吉良左京大夫

高家

いつよりもまさりて晴行中空にふけゆくはるき望月乃影

六角伊豫守　廣籌

同　詩哥

あふくんや今宵名におふ月ハ秋めて見ん君ハ光りかゝる代と

中秋霽月色掛城頭　玳瑁高筵漢月留

群士列侯争奉賦　古今賞會仰風流

大友式部大輔　義珍

同

良夜乃公をつかふまつる家へきよし

作ことに行里はれくみと奉家

名にしおふ今宵晴月も豊とし晴田面に落る秋ノの影

十六夜晴月

六角越前守　廣寿

同

秋の宵いつよりも国も君か代の光りくもらぬ月ならん

懐紙端作

横瀬駿河守　貞臣

同

おもしも遠家中晴秋乃明かりなき代の光りや月ならん

和こ

良夜乃さいつ時をはつかふまつるへきよし

作ことに行里はまもハへみて奉る二首

歳めくり名にしおふ夜の秋も行末も詞良臓郢晴月

行まつ世くふ今宵晴月乃てらす千ハ云の葉いつて行まし

良夜

廣春　同　有馬兵部太輔

月明千萬里　坐容露沾衣
可酌清尊酒　如何良夜稀

懐紙端作
秋日同詠良夜

信由　同　織田主計頭

曇なきかゝみや代ゝの池水にすみて名たかる月のさやけさ

良夜といふ題を賜りて謹詠草

高久　若年寄　京極備前守

秋風も静に空の雲をはらひて名にしおふ夜の月のさやけさ

おなしく

正敦　同　堀田摂津守

さやけさは清光の有とも秋清夜をと紀すや月のかけに流れん
曇なき御代の姿に栄行さかる南の山にすめる月影

輝和　寺社奉行　松平右京亮

秋の宵月も曇らぬ思ひすし治まる御代の恵かきり代よ
家中なる月も名高き二の根乃渡もれる露を数まてに
夜もすから木の葉の梢に白妙の数を花なる秋の夜乃月

忠精　同　牧野備前守

明らけき此代乃光りハます鏡むかふも清し望月はえ
かしこしと雖もあふかん望月の曇らぬ歌や君か代乃秋
武蔵野やはれてくまなく住む月の光りにも似ぬ露の玉の影

成貞　大目付　桒原伊豫守

良夜と申御題を下しおかれけれは元より
こゝろし一すしの道も弁へ思ひをよはぬ誠を
御笑読の種にもと恐みかへり見も畏なき詞に
任せ
幾秋かくまなき月の名にしおふ光りいやます此代の栄ゆる
月も今宵限なき此代の恵行とおふくも高き光を思ふ

良夜といへる題を賜りて

長恵　町奉行　池田筑後守

四の海千里なからもてらし見る今宵そ月に秋津洲山
又ゆくひ嵐の音も静なる代にすむ月の秋の中空
にこりけよ露の恵をかけて見る今宵の月まつ川の言の葉

廣民　御勘定奉行　久世丹後守　詩歌

及なき言の葉草に露またる名にて今月の歌の限なき
光さやかな秋津洲根乃外追ひ代々に照りそふ望月の歌

九天繁露桂花開
偏賞嬋娟命酒杯

穆々光煙明宿鳥　清々風籟拂雰埃
外平遠勝周成徳　吏治不如陶侃才
唯情分隆將努力　今年良夜亦無来

右良夜作應
教

鎮衛　御勘定奉行　根岸肥前守

大王風起白雲開　萬里江山明月来
叢桂露鮮拭珠玉　長流潮滿灑樓臺
偏憐良夜擔宮趣　誰比當時梁苑才
深識聖恩天地遍　小堂秋興自雄哉

右良夜作應
教

良夜といふ題をゑりて望詠草

廣通　御普請奉行　石野遠江守

武藏野ゝうけし環なき不二の根乃高さは今宵月の光なかしく
名にたかきは今宵乃月も光りとゝ家中の秋は不二社まされ
てきらにある心得見る夜の月秋ゝ君か代盛世や思はまさらん

良夜といへる題をよみて奉る十五首

小普請支配　詩歌　勝田安藝守

かゝる世をめてゝ神しはる久にゐ宵の林津閑は宵思はる
茫原やいくはくの夜は陽穗思へは千里乃このあ

今宵こそ清くもあれや曇なき雲晴のさえ澄登る月
照まさるらしこゝに又思ひつゝ三ツ乃夜半の月影
千代ふる松の下枝の白露を今宵の月にかゝへてや見ん
露かゝる花のすゝきを折そへて菊を盛ふ月を平の夜
流まさる今宵の月はかゝへて手なるもかりこや治世
千代乃秋波ようつりと隅田川今宵の月は霧の藤袴
天の戸や立円雲霧も晴渡る今宵乃月はいとさやけき
去よ心ほし待もまさりし杜の田の露の始まりの今宵月見ふ
咲ける人思ひ籬の菊も白ふやと見し秋の今宵の月の光は露
武蔵野の尾花が末の白雲も月もさやかに照る今宵なり
照月は行の思ひにかなりよ今宵しも松の葉ごしの秋を社見れ
秩父の嶺さえも遠けれと今宵みな月を社見れ
照らる松の葉代およひしもしも松竹の了月は流るゝふ

蒸應

敬同良夜月

御見中秋月　清輝此夜長
雲晴繡緹闌　風度珠簾畓
澤原恭仁訓　情和謹寵光
敬陪高殿上　露氣瓊筵涼

懐紙猶作秋月同詠し

詩歌 同　内藤甲斐守　正範

いつよりもさやけき月の影見えて秋の最中の夜半ぞすゞしき

涼秋三五月輪盈　玉露金風萬里清
作賦侍臣知幾々　南樓不讓庾公情

良夜

御目付　森山源五郎　孝盛

こともなくをさまりても今宵照月なかくだにいさめをぞ思ふ

今宵とて光はる月も代の恵にかゝる影や仰く諸人

同

同　石川六右衛門　忠房

いつとても秋はかはらぬ数ながら今宵の月そ又たぐひなき

今宵将世に流てと影光まさりてよふ月のさやけき

良夜といへる題を賜りて

御勘定吟味役　大森与之助　親由

今宵ほど千萬代の今まもし曇らぬ照代の月影

諸人の祝ふ言葉にも雲霧もなく清き秋の夜の月

晴渡る流よりかゝる奥迄も見へとさやけき今の月影

同賦良夜應教

同　佐久間甚八　蔵三

月出西園風色清　高秋玉兎自長生
金精揚彩懸銀闕　桂子飄香滿鳳城
背燭正開文酒宴　捲簾遥聽管絃聲
良宵共仰光輝遍　萬國衙思樂太平

良夜　忠寅　大久保内膳

同

名に高き秋の最中のいつよりも今宵の月ぞまさりて見ゆる

空の海は八十嶋かけて晴れわたる家中の月ぞ入雲もなし

賜題獻　覧之詩歌

久周　加納遠江守

御側衆

良夜といへる題をさし人々にも仰ありと
めづらしのことばにあるへき由仰せにて乃
席自詠を奉る處に
御氣に叶ひければ

名に高き月照らす数よりまされと光りあふぐん雲乃うへも
あきらけき御代のためしに幾千重の雲のうへなる月も照らん
かしこきなかにも秋の夜の月影をかさしてたまふ君の恵みを

中秋應　林大學頭
台命恭賦鄙詩八句上
秋空明月滿

仙覧上高臺　影礙華動　輪完
兎魄
閑歡深徹銀蠋恩渥擧瑶杯
盛宴徧宣賦　徹臣愧不才

大學頭臣林信敬
頓首再拜

正頼

御小性
室賀壹岐守

あふけ猶宮中の月の今宵こそ光りのみちて武藏野のはてまで

義行

佐野肥前守

同
詩歌
和文

武藏野の廣き恵と今宵月の光りも照すらん

良夜應　教

良夜無雲月似霜　捲簾涼氣入蘭常
遶池星漢分波色　蒲苑桂花濡露香
酒後裁詩乗醉態　風前撤燭敬恩光
通宵侍宴叨同樂　更覺清運倍萬常

春秋の義景を論するにはおもしろく秋を賞し花月の風
光の貌ならすとも志きは月をとゝめても中にも仲秋こそ
乃天も無藏百千の奥ゆかしく藤原の某綱か書にも
おかしく出てる夜もしも今宵の秋の宮中なとく

詠よ月を賞し給ふ事へよ月の夕といひし雅人騒客乃
消を翫ぶ事李唐の代より置ゆかんよ志て詩文
いとあふく漢の代よりも嫦娥怨といへる曲作れる例
まゝあるや作らん我國よをゐ天暦の帝清涼殿をはしめ
女かさいひしよりそ仰しと志給ふ月の今宵の名
おしゐふ詠給へ志うくの浮のよの粉くとな給
し夜は月も賞しくと大和や唐やいはく
月は清く女置る秋作りける光をもそのまゝ
よみと奉給為ならし作とすまりいまかしまる
みうけ罗りを照らし雲も思月の至まかうらぬ思
てうなれる民の戸もさゝつて頼家御代を祈ふ
さみれえいや高き中にもさやかなる光をも思ふべん
いそや雑くも民ハえよ里家の知らふあれる文も又
清ハあらゆん事の車の御のうゐ清うさの女からそら
あらんうしそ富秋乃御花月の貌ふうは清を記と清
を捨かゝしれしや粉あゝ思ひ園つかれとしかくも
妙ゝ川の道とし女しもへといふ事よ秘さまても秘ゝ家
乃うゝ紀よ帰らけくめて女紀御代よおもひ思れん
かしちつをよあまたもちうしもあとおもれ清ハあさい云の
菜ふハいうんとらつかり作られら花れいとのみなまら
さうんしもかへ里を思ひたうふ庵しと玉の影を
春さを家月の都の天の羽衣も立まて里ふくる

錦となれは露の言の葉ふれし思ひ出かゝる石清水の
情は流れの末を観てよくみとけなみしかける筆を操て
さゝけ奉るも埋根の小草なりさら恩
御恵をかしこみ奉らん

かせふきんい川しをことはの夜半の月
光りや君かいく千代乃秋

肥前ふしはらの朝臣
らし行上

利住　山田讃岐守
御小性

君か代は限なくまさる望月の光りを見る秋も幾秋

正登　新見長門守
同

名にしおふ今宵の月よ武蔵野や広き恵みをあふくなりけり

良時　藤堂織部正
同

名にしおふ宵常陸の月の幾千秋光さやかく照る夜の空

政良　小長谷能登之守
同

ゆふきつゝ君か恵の幾千秋光り曇らぬ望月のかけ

詩歌

御着明月蒲高樓
玉露金風景色幽
今夜孤輪人盡望
君恩長照幾千秋

吹風も光そふらし御代の秋の宵いてゝ曇らぬ望月の影

信成　同　小笠原豊後守

道廣き君か恵ハ久かたの清月の光りも晴れる夜の清さ

正倫　同　新見大炊頭

かはらぬ見る御代の光り乃幾千秋限なく照らす望月の影

忠勝　同　林　出羽守

名にしおふ秋ハ今宵の清き中にも光りこそ照る月のさやけさ

勝正　同　中山信濃守

秋の宵曇らぬ御代の光とてかはらさりし御の月をたのしみそふ

忠美　同　大岡主水正　詩歌

雲散清風良夜遊　皓々月色満高樓
廣庭露冷恩遍　同賞無窮萬歳秋

勝明　同　水野伊勢守

幾千と契りてすむ影もかはらぬ御代の秋の夜乃月

清豊　同　石谷式部

幾秋も光り照そふかけ鏡曇らぬ月の清き御代の秋

勝武　同　松平忠左衛門

曇りなく照らす千里もあふくらし賢き御代の望月のかけ

昌當　同　駒井加賀守

晴わたる影を名におふ秋風もしつけき此代の星月夜哉

信久　御小納戸頭取格　津田山城守

萬代乃秋と契りて名にしおふ今宵の月の影に經にけり

爲春　御小納戸頭取　平塚伊賀守

かくれなき光も今宵の名にたてゝ曇らぬ此代の星月の影

季寛　御小納戸　三上半之助

ゆふ空に見る光はいやたかく照まさりける星月のかけ

近義　同　小野勝之助

今宵はいつより照る影を見れは空中の月の光まさる哉

清鑰　同　中野監物

明らけく歌とあふきて名にしおふ今宵の月の影そさやけき

良金　同　矢橋熊之助

武蔵野ゝ尾花か末に影ひかりそふ空中の秋の月の小夜風

唐成　同　松平宇右衛門

あふけは君の恵も久方の空に名高き星月の影

爲與　同　平塚二十郎

見るほとは恵乃露に歌やよし今宵の月の名にしおふらん

茶しおふ歌ハ皓々さ此秋每よめつる宮中暁月もさやけき

貴徴　同　右松床次郎

曇なき歌を集つる宮しおふ秋の宮中乃中空乃月

利恭　同　木下万之助

言ふすむ光のみかハ秋暁月を前の名さへ雲乃ふこほらん

昌豊　同　長井友右衛門

流れ絶世ふ猶すむや池水よ今宵名よおふ月のさやけさ

道章　同　平岡友次郎

應　台命　奉賦良夜吟

霧晴一輪清
月滿萬山光似畫
遠帆連々衆浪紋
二十里外樂蒼生

政共　御広敷御用人　磯野内記

作けれ光りや清る林鐘も暁秋の木乃中中空の暁月

民さかふ御代の光りを受るる宮中秋の月哉ゆふくそ

和日非　成瀬忠八郎

千との秋思ふ歌ハ明ふ行き君か恵乃空月乃影

峯雄　同　仙蔵

明ふけさ御代の秋ふして空月の光りを雲よ誰もりふらん

益卿　奥御右筆　近藤右膳

仰ても御影ゆしへて應の大和乃惚しくに
こかけいる和歌とらしくよろしくあり家
みるめハけふや　御恵の露いつくを
くまなき家中の月は秋なるへしいとかし
たのみ何ゆかへし思ひ待てけ御歌

光をくまぬ月は今宵の雲の葉に限らく道の光りを見え家
曇なき家中の月は千金の野邊の露まし歎やとしれり

昌減　栗本元格

君か代を千々と百も高く満月を大家なみふ見るとかしこし

盛眼　太田傳庵

庵にも浮世の雲ハ払へれとりて家中の月をきつやらさ

治れる御代の恵よ大空もくまなくそ見る望月の影

櫟菴　篠崎朴庵

君もおもふ今宵乃月の光もてつ四の海辺照しかけし見えや

光りそふ家中の月は限なき幾秋の君を見あらん

正明　安藤安仙

幾千の秋豊成る世とはけふ今宵乃月の照りますこけ

惟信　持野養川

仰け御曇なきは世乃かたみとも見るくはし今宵望月の影

月代觀に叙懐　和歌

北村季春

今皆葉に月十五夜に月代觀に事いそのかゝふし

昔よりそかの根乃なかきは残りて今もかはらぬ
久方の空にさやかにさすかけは我光の山川紫岩に
に思ひ万もなく柿にすむ鳥乃かまひは河面
もおかしくおもふそなてるは絶えす乃旦暮婦り
松も訓得数なるにやましく人間流たのしみ
大夜高宴の真ハそらなりそれは里なつらはその程と
しふ陰けはくあふしりふけすとてさつかなりと光
まとはせるさのいそきはりくわあまはりかなきはる
むろの菊はおとふともさてむかひと静は詩を
職し哥を口すさみつゝかゝみふめてくつかえらと
公とやるとし甚飯ハてとなれと同しく月残悠ふ

なかんかりふしの甚盛當時ハかくとりて堅戒とし
賜ふはハおよひなき空よりもうけと月は都とう
かひらんとも返も思ひ出ハまさ深り思ふく公のと
かよ月と見候るをもます時候風杖枝なしき恵
御代の光りを継しとみふらそうえんや
云の葉にいうとそえさゝん秋陽月
およひハもきと侍り思 公残

季春上

高信　狩野永徳

なゝたる月の盛く深川民千里もおなし秋やらもん

利信　狩野永監

行道もさやけき影を出しよの御代に名高き秋の夜の月

右寛政三亥年秋八月十五夜

柳営の詩歌

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan